

富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

# Center News

Center for Educational Research and Practice  
Faculty of Human Development, University of Toyama

第30号

(2014年3月31日発行)



平成25年度 教育の情報化実践セミナー

## センターニュース第30号 目次

- |    |      |                                    |        |      |
|----|------|------------------------------------|--------|------|
| 02 | 巻頭言  |                                    | 学部長    | 神川康子 |
| 03 | 寄稿   | 教職実践演習を終えて                         | 教職特任教授 | 吉田人史 |
| 04 | 報告   | オンリーワンのエピソード、自作・活用のすすめ             | 客員教授   | 本多信昭 |
| 05 | 報告   | ほめる力を磨く                            | 客員教授   | 寺西康雄 |
| 06 | 報告   | 平成25年度第1回スクールカウンセラー研修会             |        |      |
| 07 | 報告   | 平成25年度第2回スクールカウンセラー研修会             |        |      |
| 08 | 学園通信 | 幼稚園 小学校                            |        |      |
| 09 | 学園通信 | 中学校 特別支援学校                         |        |      |
| 10 | 報告   | 教育の情報化実践セミナー                       |        |      |
| 11 | 報告   | 講演会「タブレット端末で授業はどう変わるのか」            |        |      |
| 12 | 報告   | 教育臨床部門 6ヶ月の内地留学を振り返って              |        |      |
| 13 | 報告   | 子どもとのふれあい体験                        |        |      |
| 14 | 報告   | 国立大学実践研究関連センター協議会・教大協北陸地区教育実践研究協議会 |        |      |
| 15 | 業務報告 |                                    |        |      |
| 16 | 編集後記 |                                    |        |      |

## 巻頭言

人間発達科学部 学部長 神川 康子

学部長就任以来、講演に出かけた際、はじめに必ず「人間発達科学部」は何をする学部かという説明をすることになっています。これまでも講師紹介時に正しく「にんげんはったつかがくぶ」と読んでいただけないことも多々あり、「どこで切るんですか」と言われることさえありました。

そこで、人間発達科学部は「人が生まれてから生涯をかけて成長・発達・進化していく」過程で「人自身が成長・発達する力」と「その成長・発達を支える環境を創造する」という視点から学問的、技術的、実践的にサポートできる人材を育成していますと解説し、人を育てることに関心のある方はぜひ人間発達科学部を周囲の方々に薦めたり、ご自身が入学してきてくださいとPRしています。

将来の夢がないと言われ続けてきた若者たちも、最近は大学の出口が最も気になるようで、高校生も入学直後の新生も「この大学の、あるいは研究室の学生の卒業後の就職先は？」と聞いてくるのがしばしばです。本当は夢を持ち、目標を定めて入学してきて欲しいのですが、幸い(?)本学部は学校の先生だけではなく、生まれたばかりの子どもを育てる保育から、家庭教育、学校教育を終えた後の社会人教育や生涯教育、福祉教育に至るまでの様々な人々の人生を支える人材を育成しているので、ほとんどの学生の期待に応え、時には進路変更にも柔軟に対応できる学部ですと、最近では幅の広さを売りにしています。このような説明をすると、たいていの方々は「やっと人間発達科学部の意味がわかりました」と言ってくださいます。

平成25年度はミッションに始まりミッションに明け暮れた年でしたが、私たち教職員同士も改めて学部の使命を再確認し、共通理解のもとに、少ない人的資源(&財政資源)でも学生たちの成長・発達する力を最大限に伸ばし、彼らが将来の夢に近づき、実現するために、できる限りの力をつけて社会に送り出したいと願っています。これらの使命を果たして行く上で、基幹的な教育と研究がなされているのが「人間発達科学研究実践総合センター」であると認識し、今後もますます地域密着型で社会に貢献できる成果を期待したいと思います。もちろんそのために必要な支援や応援のあり方も検討していきたいと思っていますので、皆様からの様々なアイデアや声もお待ちしています。

## 「教職実践演習」実施初年度を振り返って

教職特任教授 吉田 人史

4年生後期に位置付けられた「教職実践演習」は、学生にとって「教員免許を取得するための学習の総まとめ」の授業であり、「学びの軌跡の集大成」（文科省）の場であった。

授業後の受講者の声である。

- この演習で一番学んだことは、学び続けることの大切さです。この演習が今年から始まった時、正直、「先輩方はこれを受けなくても先生になっているのに、なぜ受けなければいけないのだろう」と思いました。今まで散々同じことをやってきたのに…とっていました。しかし、演習を続けていくうちに、いろんな人の考え方や感じ方に触れ、新しい考え方が自分の中に生まれることが多々あり、新たな発見もたくさんありました。その時、この授業は、今までの勉強を総合するだけでなく、教師として一生学び続け、自分を変えていく素地を養っているのではないかとも思うようになりました。採用試験に合格したから終わりなのではなく、これからも「教師とは何か」「教育とは何か」を考え続け、追い求め続けていかなければならないと改めて感じました。
- 課題に対して話し合い、意見を出し合う場がとても多い授業でした。（中略）現場のことについて考えるのは難しいことも多くありましたが、学びは多かったです。（中略）だんだんと私の目指す教師像が鮮明になってきたように思います。
- 4月からは実際に現場に出て、担任をすることになると思います。（中略）卒業するまでの間に（中略）本を読んだり、実践記録を分析したり、研究会にも積極的に参加したりしていきたいです。これから少しでも多くのことを経験して、魅力溢れる人間になっていきたいです。まだ、教員人生は始まっていませんが、今からとても楽しみです。

教師力育成支援の最終段階に、クラス「担任」の一人として、意欲溢れる学生と関わることができたのは、大きな喜びであった。その任を終えた今、大切であると感じるのは、「学びの集大成」実現のためには、まず指導者側が実学志向に傾きすぎないこと、そして、学生がこの授業を今までの自分を見つめ直す機会にすることである。

## オンリーワンのエピソード、自作・活用のすすめ

センター客員教授 本多 信昭

教員採用試験志願票作成のためのガイダンス指導を担当する私は、数年前から「オンリーワンの志願票」をテーマに、明確な自己主張と印象に残るアピール作りをめざしている。オンリーワンの表現は難しいことではない。自分の生き様は間違いなくオンリーワンである。まずは、自分の長所や短所、失敗や苦労した体験を聞き出すことからはじめ、エピソードとして文章化へと進む。努力や苦労は何らかの意味で教育的である。苦労の中身は何？や苦労を乗り越える努力が続いたのはどうしてかなど、共に考えるうちに学びを支援する楽しいエピソードが生まれてくる。

1999年夏、私は米国ケンタッキー州マーレー市の小学校長宅に一人、ホームステイし研修していた。54歳で小学校長3年目の私はもちろん英会話は苦手、しかしチャレンジ精神だけは旺盛であった。朝は5時起きで現地校長の日課、散歩につきあい日中は視察や研修、夜は活動のまとめと翌日のスピーチ等の準備で就寝は翌日に、スケジュールはびっしりだった。ある日、私の研修につきあってくれた校長先生が帰宅の車中でぼつりと言った。「1200年以上続く日本の伝統は素晴らしい。米国はたかだか200年足らずの若い国で伝統らしきものはない。」と弱気な言葉。私は、何か気の利いたことで元気づけようと焦った。私は、「米国民は自由と民主主義のために命を懸けている。それは素晴らしいことだ。一方で日本人には命を懸けるものがみあたらない。」とたどたどしい英語で返した。彼は黙って聞いていた。英語力の弱い私を相手に彼はそれ以上突っ込んでこなかったが、私の心にはその後の展開が今後の課題として残った。

翌年6月、落ち着きのない5年生クラスに手こずる担任より、道徳授業で子どもたちに活を入れてとのリクエストがあった。すぐにマーレー市での苦しかった体験が浮かび、日本人が命懸けで頑張るとしたら何があるかを考え、エピソード化していた。

「アメリカ人は民主主義と平和のために命をかけて戦うという。なのに、私たち日本人は自分のことだけで生きていいの？ 21世紀、これから人類、地球が生き残るために食料、医療、高齢化、環境の問題など、みんなが勉強して解決していかなければならないことがたくさんあるんだよ。」

すかさず、子どもたちの中から「〇〇ちゃんががんばればいい。」と鋭い突っ込み。

「でも、一人じゃこの大仕事はできない。大天才の周りに、中天才、小天才がいて、みんな得意なことで協力しないと地球は滅びるよ。これができる国は日本だ、日本だけかもしれない。だから勉強しよう。そして、地球と人類のために勉強する日本人になろう。」こんな内容で45分が終わった。

英会話が苦手な私の苦労話から21世紀の地球的課題克服の話して、5年生は大きく変身した。

困難に挑戦し、努力の過程で学んだことは、課題を前にするとエピソードとして成長する。

エピソードをたくさん持つ先生の授業や学級指導は楽しい。私自身は、教師の先輩の体験談から自分の体験をエピソード化することを覚えた。教員採用試験の面接では志願票内容からの質問が多い。志願票に自分の具体的な体験に基づくエピソードを入れ指導観、教育観を語れば、どんな質問にも自信を持って対応できる。そう信じてせっせと添削に応じる私たちである。

## ほめる力を磨く

センター客員教授 寺西 康雄

今、世界的な「けん玉ブーム」である。そのおかげもあってか、各方面から講演の依頼がある。幼稚園や保育所、小学校での講演会では、おしゃべりだけではなく、保護者や教職員の1人1人がけん玉を体験する時間も設けている。その際、私が考案した次のような取り組みが好評を得ている。

### 《けん玉エクササイズ「よいところ見つけ」》

1「大皿」（下にさげた玉をまっすぐ上に引き上げ大皿に乗せる技）の実技指導

2「大皿」のペア練習

3よいところ見つけ

- ジャンケンをして勝った人が挑戦者 → 「大皿」に5回続けて挑戦する。
- ジャンケンをして負けた人が観察者 → よいところを2つ以上見つけて挑戦者に伝える。
- よいところを言ってもらった挑戦者は、観察者に「ありがとうございます」とお礼を言う。
- 挑戦者と観察者とが交代する。

4 振り返り（ほめてもらって嬉しかったことなど、気づいたこと、感じたことを伝え合う）

講演会を終えると、保護者の方々からは、次のような嬉しい感想がたくさん寄せられる。

◇できたときだけでなく、できないときにほめられると「頑張ろう」と前向きな気持ちになれるということに気づかされました。子どもが何でもないと、困っているときにこそいっぱいほめていきたいです。

◇大人でもほめられると、ついうれしい気分になります。子どもにとっては、きっと、すごく嬉しいことなんだろうなと思いました。ちゃんとほめるには、子どものことをよく観察してあげることが「はじめの一步」なのだなと感じました。

◇初めて出会った保護者の方なのに、自己紹介をして、一緒にほめ合ったりして、前から親しかったかのような気分で…不思議な力がけん玉にはありましたね。

子どもをほめて育てることが大切だと言われながら「ほめ方が分からない」と訴える大人が少なくない。平木典子氏（統合的心理療法研究所所長）は「ほめることの基本は『いいな』と思う気持ちである。子どものよさが見えない、ほめることができない人は、ものの見方の訓練をするとよい」と述べている。

私は「けん玉の不思議な力」を通して、子どもにかかわる大人の方々に「ほめる力」を一層磨いていただき、日本の子どもたちの自己肯定感や自尊感情をはぐくんでほしいと願っている。



## 平成25年度 第1回富山県スクールカウンセラー研修会

センター准教授 下田 芳幸・石津憲一郎

スクールカウンセラー制度が文部科学省の活用事業となったのは2001年で、今年で13年目となります。人の心理的発達になぞらえれば、自我が確立しはじめ、他者の視点から自己を見つめなおすことの多くなる、思春期頃、となるでしょうか。

ようやく名前も認知され、職業的アイデンティティも固まりつつある一方、現場を取り巻く状況やニーズは様々に変化・多様化し、また、スクールソーシャルワーカーを始めとする他職種と協働する機会も増えてきました。その中で、「我々SCが学校現場でお役に立つとは、一体どういうことであるか」、改めて問い直す時期に差し掛かったともいえます。

そんなスクールカウンセラーの、現場にとって有益な立ち位置を考えるため、今年度第1回の研修会として、以下を開催しました。

平成25年4月27日（土）13時半～16時半

講師 吉村 隆之 先生（有吉祐睡眠クリニック／福岡県スクールカウンセラー）

演題 「学校への入り方と活動をつくるコツ」



吉村先生は、スクールカウンセラーが学校に活用していただけるようになるプロセスや、教員がスクールカウンセラーへ相談するプロセスといった、非常に現場的な研究をなさっておられます。

研修会では、そういった先生の研究成果に裏打ちされた、スクールカウンセリング活動の、展開のコツについて教えていただきました。

また、人間関係作りに役立つ、様々なワークも実践していただきました。

すぐにでも学校現場で使えるワザを知ることができ、さらに、参加者同士の横のつながりも深めることができました。参加した約30名全員が、とても充実したひとときを過ごすことができました。



## 平成25年度 第2回富山県スクールカウンセラー研修会

センター准教授 下田 芳幸・石津憲一郎

いじめ問題に対する学校現場の対応が強く求められる社会情勢の中で、「いじめ防止対策推進法」が2013年9月末に施行されました。その中で、学校はいじめの防止に関する措置を行うための組織を設置することが求められ、その構成員に関して、「心理の専門家」という文言も入りました。スクールカウンセラーに対する期待がうかがわれます。

スクールカウンセラーはこれまでも、学校で生じるいじめ問題の対応に当たってきましたが、この機会に改めて、現代のないじめの様相や予防的心理教育のあり方について学ぶため、以下の研修会を開催しました。

平成25年10月13日（日）13時半～16時

講師 増田健太郎 先生（九州大学大学院人間環境学研究院 教授）

演題 「Q-Uアンケートの活用といじめ防止について」



雑誌「教育と医学」や「臨床心理学」の編集委員も務めておられ、全国的な状況にも詳しい増田先生から、現代のないじめの特徴、スクールカウンセラーに求められることについて、といった広い視野でのお話から、いじめの四層構造を安全に体験するワーク、ペアで協力して取り組むワーク、小集団で人間関係を深めるワーク、そしてQ-Uの読み取りに至るまで、非常に盛りだくさんの内容で研修していただきました。

先生の引き出しの多さに感動しつつ、あっという間の3時間で、40名強の参加者からは、大変満足したという声や、まだまだ教えていただきたいのに時間が短すぎ、という嬉しいお叱りの声までいただきました。この研修会を踏まえ、いじめ問題にもよりよく対応できるスクールカウンセラーでありたいと、気持ちを新たにすることができました。



## 附属幼稚園から

---

附属幼稚園 瀧川江利香

今年度は「豊かな心をはぐくむ」を研究主題に掲げての5年間の研究のまとめの年度となりました。これまで4年間の研究から、子どもの内面の高まりを意図的に支えていくには、子どもの思いや願いをとらえ、子どもを取り巻く環境がその子どもにとってどのような意味をもつのかを見取って、援助につなげていくことが大切だと分かりました。4年間の成果と課題をふまえ、今年度は副題を「～より確かな援助を求めて～」とし、実践研究を進めました。

5年間の研究から「豊かな心をはぐくむ」保育には、ねらいを明確にした意図的な援助、子どもへのより確かな内面理解に基づく援助、子どもにとっての身の回りの環境がもつ意味をふまえた援助、子どもの先行経験や未来への見通しをふまえた援助が欠かせないということを確認することができました。

また、今年度も大学の先生方には、研究保育の助言はもちろん、日常の事例研究についても専門的なご意見ご指導をいただき、年間を通して大学と連携をとって進めてきました。6月18日（火）の保育フォーラムには、文部科学省初等中等教育局幼児教育課 教科調査官の津金美智子先生を講師にお迎えし、県内外から200名余りの方の参会を得ました。協議会では、より確かな援助とは何かについて活発な意見交換が行われ、子どもを多面的にとらえて援助する大切さについて学びました。

次年度は、「子どもの体験を支える」という新たな研究テーマを掲げ、さらに附属幼稚園の保育実践力を高めていきたいと思えます。

## 附属小学校から

---

思考を活性化させたときの認識の深まり

附属小学校 澤柿 教淳

子供は、それまでの認識と矛盾するような事象や考えに出合ったとき、自ら思考を組み替えて違った視点から対象を認識し直そうとします。新たな知識や技能等もそこに加わって、少しずつものごとの本質に向かっていくのです。私たちはこれを「思考の活性化」の局面とおき、授業の中でも特に大切にしてきました。

本年度はさらに、「思考の活性化」の局面の前後の認識を比較・分析することに取り組んでいます。子供の認識は、様々な知識や技能や経験と複雑に結びついていることが多く、その解明作業はまさにわくわくの連続です。

そもそも、授業の中で「思考の活性化」の局面が生まれなければ、実践研究のスタートラインにすら立てないというのも我々を本気にさせる理由の一つです。授業者が一方的に矛盾を投げ込んだとしても、反対に、授業者がねらいに対して直球を投げ込んだとしても、子供の側にいつも「思考の活性化」の局面が生まれるとは限らないのです。

附属小学校が脈々と続けている研究は、授業者側の想定通りに授業を行う研究ではありません。子供の発言や取り組みを、教師が生かし、そこに生まれた学級の渦を共に高めながら、一体となって授業を作り上げていくことでしか進めることのできない研究です。それは授業の再現性をいかに高めていくかというよりは、むしろ授業がもつ偶有性にいかにフィックスしていくかというような、真に実践的な研究だと思っています。

附属学園が実践センターのお役に少しでも役立てば幸いです。



## 附属中学校から

---

附属中学校 萩中奈穂美

附属中学校では「言語活動の明確化と充実」を研究テーマに、授業を通じた実践的研究を進めています。「言語活動の明確化」とは、「言語活動について、適切で有効な方向性をもって単元・教材等を構築すること」、「言語活動の充実」とは、「授業実践において生徒が行う言語活動の質を高め、確実かつ効果的に生徒の学力を高めること」であると考えています。こうした共通認識のもと、内容として「1 言語活動の目的」「2 言語活動の方法」「3 言語活動の評価」について研究しています。6月の教育研究協議会では、昨年度に引き続き全教科の授業を公開し、学内外から多数の参加をいただきました。貴重なご意見も賜り、今後の研究について示唆を得ることができました。

また、校内においては、言語活動を通して付けたい力を明確にした授業の構築に努めるとともに、事後の協議会では、取り入れた言語活動は生徒の思考力等を高めるための手段として有効に機能していたのかについて、その取り組ませ方（方法）を中心に意見交換してきました。こうした視点が日常の授業でも生かされ、思考しながら学び合おう生徒の姿が見られるようになっていきます。来年度最終年次を迎える本研究は、「3 言語活動の評価」の解明へとシフトしており、今後は言語活動を通して生徒の思考の様相をどう見取り、どう生かしていくかについて、追究していきます。今後ともよろしくお祈りいたします。

## 附属特別支援学校から

---

附属特別支援学校 加藤 雄一

特別支援学校では、本年度より新たな研究主題として「キャリア発達を促す授業づくり～『参加』を高める力を伸ばすために～」を掲げ、実践、研究に取り組み始めました。昨年度までの「児童生徒が地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか～キャリア発達を育む授業づくり～」を研究主題とした2年間の研究の成果と課題を受け、引き続き「キャリア教育」の視点を取り入れた実践を行っています。

本校では、児童生徒の「望む姿・望まれる姿」を思い描き、学部間の連携を図りながら児童生徒の「『参加』を高める力」を伸ばす授業づくりができれば、キャリア発達が促され、地域社会で主体的に活動する姿を実現することができると考えています。それに向けて、本校の考える「『参加』を高める力」を指導目標に取り入れた授業づくり、日常生活の指導「チャレンジタイム・朝の会」における学部間のつながりを明確にした仕組みづくり、児童生徒の「望む姿・望まれる姿」の捉え方を明確することの3点を研究の柱として取り組んでいます。

本校では、例年2月に教育実践研究会を開いて、1年間の研究の成果を県内外の学校へ向けて発信しています。しかし、本年度は校舎の耐震工事をしており、10月から半年間、仮校舎での授業を行っています。そのため、本年度は教育実践研究会を行わず、来年度10月に行い、1年半の研究の成果を報告する予定です。

本年度も研究を進めるにあたって、学部の川崎先生、阿部先生、水内先生に貴重なご助言・ご指導をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

## 平成25年度教育の情報化実践セミナー 「思考のツールとして電子黒板の機能を活かす」

京都光華中学校高等学校 教諭 竹中 章勝 先生

平成26年2月7日（金）に、人間発達科学研究実践総合センターと富山県教育工学研究会の主催による、平成25年度教育の情報化実践セミナーが開催されました。会場は学部3棟の341講義室で、大学教員、学校教員、大学院生、学部生、他学部生をあわせて53名の参加者がありました。講師の竹中先生は、京都光華中学校高等学校において高校の情報科を担当されています。今回は、電子黒板を活用して、学習者の考えを活性化する方法について、実践事例を中心に講演していただきました。

### （1）なぜ電子黒板（IWB；Interactive White Board）なのか

i Padに代表されるパッド型のコンピュータは、検索、メール、文書作成、プレゼン、デジカメ、ビデオ、音楽プレーヤーとしての機能を持ち、学習の個人ツールに必要な基本機能を備えている。

一方、電子黒板（Interactive White Board）は、黒板と同じように利用することもできるし、実物投影装置や電子黒板用のソフトウェアによって、書いたり、板書を保存したり、切り替えたり、教科書や教材（静止画や動画）を拡大提示したりできるし、授業中に学習者の注意を教師や発表者に集中させることができる。つまりIWBを活用することで、手書き文字や教師の動作情報を含めて、効果的に情報提示を行うことができる。

### （2）IWBを活用した授業の展開

IWBを用いることで、授業を省力化し、授業に時間的余裕を作ることができる。そして、余裕ができた時間で、学習者の思考を活性化する活動を行うことができる。

学習者の思考を活性化するためには、IWBを学習者と教授者（あるいは学習者と学習者）を結ぶメディアとして活用することが重要である。竹中先生の実践では、IWBと板書を記録するソフトウェアの機能を用いてデジカメの画像を拡大し、その上に生徒の意見を手書きで書いて、思考のプロセスを含む知識のパーツ（表象）を作成する。作成したパーツを縮小し、複数のパーツ間の関係を考えて、「何が、どうして、こうなる」という論理の流れを理解させる。このような活動を教師が繰り返し提示し、生徒にも作らせる体験をすることで、学習者の思考のツールとしてIWBを機能させることができる。

### （3）ノート・テイキングの方法の改善が思考を高める

イギリスは、IWBが98%の教室に設置されている先進国である。しかし、イギリスの生徒はノートを取る習慣がない。アメリカでは、ワークシートに穴埋めしている。ネパールでは、学習者が教師の板書を、そのままノートに写すが、帰ってからも、教科書や資料から必要な情報をノートに書き写すことで記憶を定着させている。日本は、イギリスやアメリカに近い先進国だが、ノートの取り方についてはネパールに近い。

前述したようにIWBを教師と生徒の情報共有＋協働思考の場として用いることで、学習者の思考力を育てる活動が可能になる。しかし、その活動を学力と思考力に結びつけるためには、授業を受けて情報を記録するだけでは不十分である。教師と生徒の協働活動をメタ認知し、それを自分で思い返せるようにノートの形にまとめる必要がある。

竹中先生の実践では、IWBを用いて教師や生徒の思考の内容をパーツ化し、パーツ間の関係を学習者と教師が協調して考え、その思考結果をパーツ間の関係としてノートの形にまとめることで、学習者が授業の中で共有した思考のプロセスを、対象化しメタ認知することを可能にしていた。

このように、学習者の情報活動を、IWBによる学習情報（知識）のパーツ化と思考プロセスを対象化するノートによって知識にまとめ、メタ認知する活動が、学習者の思考力を高めていくという竹中先生の話は、非常に示唆に富んでいました。講演を聴いた参加者にとって、とてもインパクトのある講演でした。

## 講演会 タブレット端末で授業はどう変わるのか — 小学校における授業実践例から考える —

センター准教授 長谷川春生

11月30日（土）、新潟大学教育学部附属新潟小学校の片山敏郎先生を講師にお招きして、標記の講演会を開催しました。

小中学校、教育センターなどの先生方、デジタル教科書・教材の開発等にかかわる企業の方々、教員を目指す学生の皆さんなど50名以上の参加がありました。

タブレット端末を活用した学習は現在とても注目されています。しかし、具体的にどのような教科や領域で、どのような目的で使用すればよいのかということについては、十分には理解されていないように思います。今回の講演会では、そのような点について具体的に理解することができて、大変有意義であったと思います。

授業における具体的な活用例の紹介では、国語などの教科での活用、そして、総合的な学習の時間における活用について詳しくお話がありました。特に総合的な学習の時間における活用においては、タブレット端末を表現や思考の手段として十分に活用できることがよく分かりました。

また、グループワークセッションとして、「タブレット端末を活用した授業のメリットと課題・不安」をテーマに小グループで話し合う活動もありました。話し合いの中で出された意見は、タブレット端末のアプリであるマインドマップを使ってまとめました。テーマについて考えを深めると同時に、タブレット端末のアプリを活用する体験もできて有意義でした。最後には代表のグループから話し合いの結果などについて、マインドマップを使った発表がありました。片山先生のお話を参考に、話し合いを進めたり、その結果を発表したりすることにより、タブレット端末の活用についての理解をさらに深めることができたと思います。

大変すばらしい講演会となりました。片山先生、そして、参加された皆様に感謝いたします。ありがとうございました。



## 教育臨床部門 6ヶ月の内地留学を振り返って

学校現場で激動の日々を送っていた生活が、10月1日を境にガラッと変わりました。最初はあまりにも時間に余裕がありすぎて、「こんなにゆとりがあつていいのだろうか」と逆に焦りを覚えました。しかし、少しずつ大学での生活にも慣れていき、これまでの自分の教員としての取組を見直すよい機会になりました。教員生活17年目ともなると、これまでの経験に頼りきって、目の前の業務をただひたすらこなすという日々になっていました。しかし、時は流れ、自分たちが学生時代や若い頃に学んだことが、現在では通用しなくなっていることもあります。教師は、いくつになっても常に学び続けなければならないということに改めて気づかされました。

毎日の授業では、学ぶ喜びを実感することの連続でした。特に、臨床心理学の授業で発達障害や精神疾患についての知識が増えるにつれて、このようなことを当時知っていれば、これまで出会ってきた生徒にもっと適切な関わりができたのでは…と後悔することも度々ありました。今後、現場に戻ってからも、今回の内地留学で再認識することができた「学び続ける姿勢」を忘れないで、生徒たちに向き合っていきたいと思います。半年間、本当にお世話になり、ありがとうございました。

浅生 昭夫

富山大学への内地留学が始まって最初に思ったのは、やはり学ぶことは楽しいということでした。ただ教え込まれるのではなく、知らなかったことを知りたい、自分を一步前進させたいという気持ちで学べるのは幸せなことです。このことは、自分が学校現場で教科指導や生活指導をしているときに生徒がそのような気持ちで学べるようサポートできていたかどうか、見つめ直す良い機会となりました。

講義では生徒指導や発達障害など、学校現場に役立つ知識を学ぶことができました。中でも元気の生徒、自身の課題や対人関係などで不安定な生徒、発達障害がある生徒など、様々な生徒がともに過ごす教室の中で、どのように見つめて理解し、どのように支援や指導をすれば良いのかという部分が、今までの教師としての経験や知識と照らし合わせることであるいは納得でき、あるいは新たな発見となりました。毎週行われている研修会では、内地留学生がお互いに自分が気になっていることをまとめて発表し合い、それぞれの教師生活で得られた経験や視点を、プレゼンテーションを通して吸収し合うことができました。

他にも施設訪問などこの機会でないとなかなかできないこともさせてもらっていますが、知識や世界が広がると同時に、もっと学ばなければならないことがたくさんあるのだということを思い知らされています。今回の経験を教師仲間と共有し、生徒のために役立てていきたいと思っています。

大西 一徹

講義では、これまでの経験内容と照らし合わせて考えながら、どれも興味深く学ぶことができました。これまでに出会った生徒のことを思い返し、反省することもありました。たとえば、境界性人格障害について学んだときは、この問題となる障害を改善するために本人に対してできることは今のところないが、周囲が障害について理解しあうことが大切で、それが、周囲への被害を最小にとどめ、結局は本人のためにもなるということを知りました。もっと、家族と教員集団で本人の症状について話し合う必要があったということを知りました。

しかし、教師は現場で「試し」をするわけにはいきません。常に生身の生徒相手の「本番」です。その時その場で最善のことを生徒たちに対して行わなければなりません。そのためにここで学んだ知識、考え方は大きな力となると思います。そしてこれからも学び続けることの大切さを改めて感じています。指導してくださった先生方や訪問を受け入れてくださった関係機関の方々、現役大学生の皆さんとの出会いに感謝しつつ、生徒たちに、ここでの学びをしっかりと還元できるように学び続けていきたいと思っています。

小林 仁美





## 子どもとのふれあい体験

センター准教授 長谷川春生

「子どもとのふれあい体験」は、子どもを対象とした事業にボランティアとして参加し、各コースの活動を通して子どもとふれあい、子どもについての理解を深め、教師としての基礎的資質を向上させることを目的とした授業です。本年度も7つのコースが設けられ、140名近くの学生が活動に取り組みました。活動を終えての3人の感想を紹介します。

発達教育学科 学校教育コース 1年 古原 大嵩

私が参加した「となみ野100旅コース」は、子どもと共に100Km以上を5日間で歩くというものでした。子どもの命を預かる事業なので、この活動を運営するスタッフとして成長するために、たくさんの事前研修を重ねました。ですので、本番、ゴールした時の喜びと感動、そして、達成感言葉に表せない程でした。

私は、活動を通して、子どもたちが大きな目標を達成するためには、指導する側の私たちが変わること、自分の課題を克服するために古い殻を破ることが大切だと学びました。自分の課題に向き合えるからこそ、他人の話や悩みを聞いて、解決するための力になれたり、子どもたちを目の前にした際に、どうすれば目の前の子どもたちを成長させることができるのかを考えたりすることができるのだと思います。

発達教育学科 学校教育コース 1年 井田 百合

「野外活動Cコース」では、子どもたちが自然とふれあいながらの様々な活動を通して、社会性、協調性を高めるための支援をしてきました。5泊6日という長い時間を共に過ごしたり、子どもたちにとって困難が伴う立山登山などで密接に子どもたちとかわり合ったりすることを通して、子どもたちとのふれあい方、指導の方法、子どもたちを喜ばせたり、学ばせたりする企画の仕方などを、私たちは吸収することができました。

子どもとのふれあい体験で、子どもたちと過ごした時間は、自分自身の成長にプラスになるものであったと強く思います。ここで学んだことを、この先の教育実習やボランティア活動などにも生かしていきたいと思っています。

発達教育学科 教育心理コース 1年 平野 光輔

私は「不登校児童生徒の援助コース」に参加しました。私が子どもたちと接する上で一番気を付けていたのは、子どもたちのナイーブな問題について、気を付け過ぎないということです。子どもたちと一緒に楽しい経験を共有することが大切だと考えました。

私は、子どもたちと動物園やキャンプに行きましたが、子どもたちと一緒に遊ぶことは楽しかったし、子どもたちが笑っている様子を見るのはうれしかったです。ですが、子どもたちを引っ張っていく立場としては、まだまだ自覚が足りなかったです。もっと積極的にかかわって、進行などをイメージしながら活動していくべきだったと思います。活動を通して子どもたちとの接し方などについてもたくさんのことが学べて有意義でした。

## 第83回国立大学実践研究関連センター協議会報告

センター教授 小川 亮

平成25年9月20日（金）、秋田大学教育文化学部において、表記の協議会が開催された。富山大学からは、小川センター長が参加した。午前の部は、下村会長（三重大学）ならびに四反田秋田大学教育文化学部長の挨拶に続いて、議事録の確認と2012年度会計収支報告、部門報告、部門計画、2013年度事業計画が説明された。会長から、年報について提案があり、「部門報告を各センターの資料の前に回すこと」、「活動概要を、各センターの報告の最初につける」、「センター協議会の沿革をまとめる」ことが了承された。

各センターからの報告と情報交換が行われ、ミッションの再定義・実務家教員・教育臨床部門の位置づけ・附属学校の情報化を中心に、各センターから報告が行われた。

午後は、秋田大学教育文化学部附属小学校の公開授業の参観が行われた。

授業参観の後、＜教育臨床部門＞ ＜教育実践・教師教育部門＞ ＜教育工学・情報教育部門＞ の部門会議が行われ、各部門の幹事を中心に議論が行われた。

## 第84回国立大学実践研究関連センター協議会報告

センター教授 小川 亮

平成26年2月18日（火）、東京学芸大学において、表記協議会が開催された。富山大学からは、小川センター長が参加した。午前の部は、下村会長（三重大学）ならびに村松東京学芸大学学長の挨拶に続いて、文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長 佐藤弘毅氏から「教育改革について」というタイトルで講演をいただいた。講演内容は、現在の教員養成課題とその課題への対応としての教育改革について、各大学で行われている先進的な事例を中心に説明が行われた。

午後は、各センターからの報告と情報交換が行われた。その後3つの部門会議が行われ、各部門の幹事を中心に議論が行われた。

## 平成25年度日教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会

センター准教授 長谷川春生

平成25年10月31日（木）、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センターにおいて表記の会が開催された。当センターからは、長谷川が参加した。

次の3つのテーマについて協議を行った。

1. 地域連携の実施状況
2. 教職実践演習の実施（取組）状況、教員養成スタンダードの運用状況
3. 教育相談事業（臨床相談事業等）の実施状況
4. 実践センター改組の状況について

1については金沢大学から石川県教育委員会の「いしかわ師範塾」における協力体制についての報告、2については福井大学から教職実践演習の具体的な演習内容についての報告などがあり、有意義な会となった。

## センター日誌 平成25年度の実践センターの主な行事

---

- 平成25年 4月10日 センター会議  
4月27日 平成25年度第1回富山県スクールカウンセラー研修会  
4月24日～25日 教育実習事前指導（他学部）  
5月8日 センター会議  
5月29日 附属人間発達科学研究実践総合センター運営委員会  
6月12日 センター会議  
6月18日 教育実習協議会（附属小学校）  
6月26日～7月24日 教育実習事前指導（人間発達科学部）  
7月17日 センター会議  
附属学校運営委員会  
9月2日 センター紀要編集委員会  
9月4日 センター会議  
9月4日 教育実習運営協議会  
9月20日 第83回国立大学教育実践研究関連センター協議会（秋田大）  
10月16日 センター会議  
10月13日 平成25年度第2回富山県スクールカウンセラー研修会  
10月14日 日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会（札幌）  
10月31日 日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会（金沢大）  
11月13日 センター会議  
11月30日 学習環境研究部門講演会「タブレット端末で授業はどう変わるのか」  
12月11日 センター会議  
12月20日 教育実践総合センター紀要第3号（通巻19号）発行
- 平成26年 1月15日 センター会議  
2月7日 平成25年度教育の情報化実践セミナー（教育工学研究部門）  
2月12日 センター会議  
2月18日 第84回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大）  
2月28日 教育実践研究（センター紀要）発行  
3月5日 センター会議  
3月31日 センターニュース発行

## 編集後記

---

平成25年度も終わりを告げる3月がやってきました。自宅の庭にある2度咲きの桜は、もう小さな白い花をつけています。今年度の実践センターの取り組みを中心に、センターニュースを発行することができました。加えて、今回のニュースでは、初年度の教職実践演習に取り組んでいただいた特任教授の吉田先生に寄稿をお願いしました。また、例年通り、附属学校園の取り組みについても報告をいただきました。

今年度は、富山でもめずらしいほど雪が少なく、過ごしやすい冬でした。一方で関東、甲信で記録的な大雪となり、鉄道も飛行機も道路も遮断された状態が報道され、一部で孤立した地域が出たり、国道や高速道路で立ち往生した自動車が丸3日も動けない状態が続くなど、いろいろな所で大きな影響が出ました。1日に1メートルの雪は、自分が上越に住んでいるときには、何度か経験したことが有り、確かに大変ですが、交通は確保されていました。問題は、そのような事態を想定した対策がなされていない場所で、多くの雪が一度に降る「豪雪」（豪雨がそのまま雪になった状態）が起こってしまったことにあると言えるでしょう。昨今の教育改革についても、時勢を先読みして、臨機応変な対応ができるようにしていくことが必要と思います。実践センターの今後についても同じ事が言えるのではないかと感じています。

センター長 小川 亮

印 刷	平成26年3月31日
発 行	平成26年3月31日
編集発行	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター 代表者 小川 亮 〒930-8555 富山市五福3190 電 話 076-445-6380